まほろば本店店長　大橋　和則

自然食品の問屋さんの企画で、福岡の製造メーカーの見学会と自然食品店の勉強会が一泊二日でありました。それに合わせて、普段中々行けない取引先訪問を企画し、去る 3 月 12 日から 15 日に掛けて鹿児島、長崎、熊本、福岡を、編集長の島田と二人で九州縦断視察に行ってきました。今まで二人でお店を空ける事は無いようにしていたのですが、今回はまほろばも 30 年経ち、今後の方向性も視野に入れた勉強と思い、旅に出ました。

# 訪問先①

## かごしま有機生産組合

**住所**　鹿児島県鹿児島市五ヶ別府町 3646

**設立**　1984 年

**組織**

生産者　160 名
自然食品直売所 3 店（地球畑）
レストラン 2 店
直営農場 4 ヶ所
有機農業支援センター
従業員　80 名　パート含む

前列左が代表の大和田さんご夫妻。生産者の方々と一緒に

**販売品目**

有機農産物・無農薬無化学肥料の農産物、果物、お米等、加工品

**設立時の目的**

今から 30 年前、高度経済成長の弊害が水俣病をはじめとする各種の公害の多発という形で出てきた時代、10 人

の仲間で集まり、食と農の原点に立ち返り、暮らしを見直す有機農業に取り組むことに

### 組合三原則

1、無農薬栽培の農法を守り発展させる。
2、有畜複合経営を基本に土作りに心がけ、安心でかつおいしい農産物づくりに日々努力する。
3、お互いが自主、自立の精神で、相互扶助につとめ、採算と生活の向上をめざす。
又、消費者との信頼を深め、交流を図り、農的地域部会づくりに積極的に参加する。

### まほろばとの取引

震災後の 2011 年より、冬季間の 11 月から 4 月頃まで

### まほろばの仕入れ品目

ニラ、小松菜、ホーレン草、春菊、菜の花、レタス、水菜、深ねぎ、セロリ、玉葱、里芋、レンコン、大根、かぶ、、さつま芋、人参、空豆、じゃが芋、柑橘　等々

直営農場にて。

### 訪問した感想

代表ご夫妻とお会いし、昨年創業 30 周年と聞いてまほろばと全く同じなので急に親近感を持ちました。お二人で始めた思いが形になり、有機と無農薬のこだわりで全国に取引先を広げ、地域に於いてオーガニックフェスタを企画するなど、啓蒙活動を通じ有機農業の大切さを伝えているようです。2009 年には有機農業を目指す新規就農者のために有機農業支援センターも建設し、農業の後継者の育成にも力を入れているとの事です。

今後の課題は、お子さんが 3 人とも嫁いでしまっている為に代表の後継者問題に悩まれているようでした。時代的に何処も同じような時期に来ていると感じました。

直営レストラン「草原をわたる船」

# 訪問先　②

## ながさき南部生産組合

**住所**　長崎県南島原市北有馬町白山下 2465-1

**設立**　1975 年

### 組織

生産者　150 名
本部集荷場 2,892 ㎡　国見事業センター 8,300㎡
直売所 1 ヶ所（大地の恵み）402㎡
直営農場

ハウスで栽培中の水菜とほうれん草

### 従業員

40 名　パート含む

### 販売品目

主に特別栽培農産物、果物、米等、農産加工販売、生産資材の販売

### 設立時の目的

長年にわたって続けられてきた近代農法による農業を見直し、消費者の皆さんに安全、安心な食べ物を供給する為に、生態系を重視した栽培を実践。農業者の自立と消費者に支持される組合作りを目指しています。

### まほろばとの取引

震災後の 2011 年より、冬季間の 11 月から 4 月頃まで

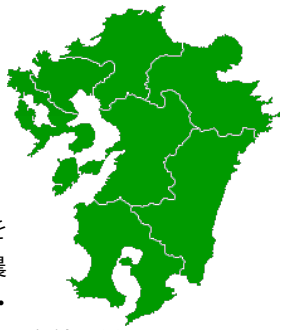
### まほろばの仕入れ品目

トマト、きゅうり、キャベツ、ブロッコリー、小ねぎ、小松菜、ホーレン草等

### 訪問した感想

車窓から眺める雲仙普賢岳

島原の港に近づくにつれて雲仙普賢岳の火砕流らしき跡が今でもくっきり残り、当時の記憶が蘇って来ました。雲仙岳を中心に、起伏に富んだ丘陵地が広がっており、眼下に有明海や天草の島々を望む風光明媚な地の南西側に会社がありました。集荷場が思っていた以上に大



きく北海道の田舎の農協より立派でびっくりしました。

取引先を伺ってみると生協さんや、大手の宅配業者などに専用トラックで配送との事で、伺う前はそれなりの発注量と思っていましたが、規模の違う面倒な注文に対応して頂いていたのだと頭が下がります。

40年前に5人から始まった組織が、特別栽培の比較的栽培しやすい基準と取引しやすい農産物の価格により、生産者と取引先を確実に増やし、今に繋がっている様に感じました。施設や直営農場も国の補助事業を上手く利用し徐々に

ハウスの前で、案内頂いた陶山さん（右）と農場長

拡大。外品の野菜の販売にも大きな直売所を運営し、独自の流通網を通じ事務手数料を抑え、生産者の所得向上に尽力しているようです。

地域の農協のような存在で生産者が使用する資材も販売。島原半島の地域特性を上手く活かしていると感心しました。今後の課題は過疎により、選果場で働く人が高齢化と人手不足で機械化を薦めて行かざる得ない状況で、補助ロボットも検討中との事でした。

# 訪問先　③

## アンナプルナ農園

（アンナプルナとはヒマラヤ山脈の山の名で、インドの神話の食料の女神さまです。地球あるいは大地を意味します。）

**住所**　熊本県菊池市原４４９０

### 組織・目的

正木高志、奥様・チコ、長女・正木ラビ、ご主人・オト

### 園主の正木高志さん

60年代なかばからインドを遍歴しヨガを学ぶ、80年代にこの地でアンナプルナ農園を開く。アンナプルナ農園では農薬・除草剤・化学肥料を使わずに、できるだけ自然に沿った方法でお茶を栽培。約2㌶。
農業の傍ら講演や執筆活動を行い、ヴェーダーンダ哲学の翻訳も手がけている。著書に「スプリング・フィールド」「木を植えましょう」「出アメリカ記」「空とぶブッタ」など。家族４人による音楽バンド「チトララタ」を結成し、CD「木を植えましょう」「モリノコエ」も販売。正木高志の作詞作曲を中心に「自然回帰」をテーマにした楽曲を演奏しています。

### 植林ボランティア活動

農園の裏山には2000年と2005年にみんなで心を込めて植樹した森〈花鳥山〉があります。植林ボランティア「森の声」主催

### 昨年、農園の１ｋｍ先にある廃村になった集落5㌶を購入。（自費で）以下購入に至った経緯（アンナプルナ農園HPより）

［１］８月新月から11月の新月まで90日間、廃村をよみがえらせて「ふくしまの神、森の精、木の精、動物や植物たちが営んでいた暮らしを乱さないように、その人たちによろこんでもらえるように、心をこめてゆっくりと村をひらきました。これはまだ小さな貧しい果実にすぎませんが、昨年のワークの収穫である「ふくしま文庫」の種を、山の神さま、水の神さまに捧げてお返しします。この種が春に芽を出してスクスクと育ち、今年の秋にはもっともっと豊かな実りをもたらしますように。

［２］天を衝（つ）くかのように聳（そび）えるグローバリズムのピラミッドは、座礁して傾いたタイタニックのような、沈没しかかった現代文明の上に築かれています。それはまもなく文明もろとも崩壊するでしょう。歴史学者のＡ・トインビーは『歴史の研究』で、「ある文明が崩壊すると、その原因となった問題を解決する新しい文明があらわれて救世主の役割をはたす」と語っています。フクシマという問題を抱えて古い文明が崩壊しつつあるいまこそ、

茶畑を望んで、正木さんご夫妻とオトさん

この問題を解決する新しい文明が誕生するときです。救世主とは福島の原発事故の影響をもっとも強く受けて生きてゆかざるを得ない子供たちです。その子供たちが人類に課せられたフクシマという問題を解決する能力や技術を開き、育てる場となることを願って、よみがえったこの村を「ふくしま文庫」と名づけました。

古民家をカフェやショップ、文庫などとして活用

上木護の集落は約５ha ほどの広さです。村は４つのパートからなっています。

**1 水源の泉**　水神さまをまつり、水源をまもるプロジェクト

**2 TEMPLE**　村の入口のイベントハウス（アンナプルナ農園の経営）

**3 分譲地（仮称）**　個人で家を建て、村に参加する人たちに提供する場所

**4 ふくしま文庫**　開かれた参加型のコミュニティ。NPO 法人化予定。

ふくしま文庫は３ha ほどの広さで村の中心部をしめます。文庫には３つの機能があります。

①**図書室**：子供たちのオルタナティヴな学びの場

②**ドミトリー**：福島から保養にくる子供たちの宿泊所

③ **KEOLA**：教科書研究所。出版や通信の発行する

これらの働きはいずれも器としてのものです。文庫がフリースクールを運営するわけではありません。さまざまな学びや自主保育のグループに場所を提供します。福島からの保養についても、招待する主体ではなく、保養を推進するグループに無料で施設を提供します。

村の山側にある水源の泉

［３］サナギの中で、イモ虫の細胞が死に、かわりに蝶になる新しい細胞が誕生します。蝶の細胞がある程度増殖すると、細胞がつながって自己組織化し、頭や胸や羽などの器官を形成します。すべての器官ができあがると全体が自ら組織化され、羽化して蝶々が誕生します。そのように、これからふくしま文庫のそれぞれの器官が自ら組織化され、さらに村全体が自己組織化されて、新しい文化を創造する基となる新しい村が誕生するでしょう。

## 販売品目

緑茶、ほうじ茶

## まほろばとの取引

12 年ほど前、奥様の実家がある札幌に帰省されている時、ご来店されたのがご縁

## まほろばの仕入れ品目

緑茶　商品名アンナプルナ茶

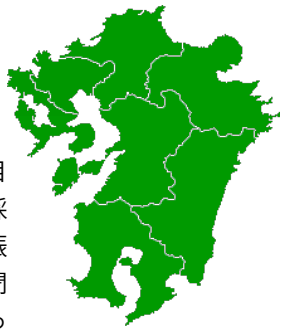
## 訪問した感想

農園と以前に植林した花鳥山、そして買い取った廃村を散策し、奥様が長年の夢だった五右衛門風呂がお茶畑の中にあり、こんな生き方、暮らし方もあるのだと思いました。

帰る前には家族４人でミニコンサートを開いていただき、聞き覚えのある歌が心を更に和ませてくれました。窓からは遠く彼方に阿蘇の山並みがうっすらと影を潜め、西日が家の中まで入り最高のロケーションと心に響く歌声で、忘れかけていた懐かしさを胸に感じ、このまま暫らく時間が止まってほしいと願うほどの贅沢なひと時を過ごさせていただきました。

贅沢な夢のようなひと時…

何もないところからヴィジョンを描き、実現する力と技を身につけ、情報を発信することで人を惹き付ける原動力となり、いずれ新しい村が誕生する予感を感じ、村を後にしました。



# 訪問先　④

## ㈱水の子

### 住所

熊本県八代郡氷川町若洲 65 番地

### 組織・目的

平成 18 年、水俣湾親水緑地に設立された「水俣病慰霊の碑」には次のような言葉が刻まれています。

不知火の海にあるすべての御霊よ
二度とこの悲劇は繰り返しません
安らかにお眠りください

水俣病の子供たちとの出会いが、水の子会の原点です。
「熊本県民として水俣病のことを忘れてはいけない」
「二度とこのような悲劇を繰り返してはいけない」
私たちの想いは 30 年前のあの日と変わっていません・・・
いまから 30 年前、私（上村）は水俣を訪れました。そこで見たのは不自由な体を引きずり、仲間も無く寂しそうに生活している 胎児性の水俣病患者の姿でした。保育園に通う子供たちをもっていた私は、胎児性の子供たちと自分の子供たちの姿が二重に写り、身の毛のよだつ思いがしました。「自分がこのまま農薬を多投する農業を続けていたら、いつか自分がこのような不幸な子供を生みだす加害者になってしまうのではないか」そんな思いが脳裏をかすめたのでした。意を決っして当時まだ珍しかった有機農業に取り組み、自ら販売も手掛け売り込みに歩きまわり、平成 3 年に同じ志も持つ仲間と水の子会を設立。

代表の上村さんご夫妻と息子さんご夫妻

水の子という名前は、日ごろ忘れがちな水の恩恵に感謝し、大切にしていこうという趣旨で付けています。
また、流通には信用が大事と平成 5 年に有限会社水の子を設立。日本で最初の石鹸運動をする生産団体として全国の注目を集めています。
現在の会員は約 40 名。

### 販売品目

おもに、桜たまねぎを始めとする露地野菜、温州ミカンなどの柑橘類、そのほかにレンコン、い草などを栽培・生産しています。加工品販売

### まほろばとの取引

2014 年 2 月頃より　本店で働いている福岡出身の山田が、以前アトピーが今よりもっと悪化していた時に、仕事先として一旦は採用されるものの、目が悪く作業上安全が確保できない為に不採用なった。しかし、その後も山田の身の振りを心配して連絡を頻繁に取っていると聞き、そんな方が栽培している蓮根は、きっと良い蓮根だろうと思い取引を始めました。

### まほろばの仕入れ品目

あかね蓮根（在来種）、蓮根粉、蓮根うどん、蓮根そうめん、蓮根のどあめ

### 訪問した感想

事務所にはありがとうと書いた札が壁の至る所に貼ってあり、畑にも農作物への感謝の想いが伝わるように、「ありがとう」と手書きした札をさげたり、野菜に手を触れて感謝の言葉をかけたりしているとの事です。

蓮根栽培のほ場は初めての視察で、水田の土中深く埋まっている蓮根を掘り易くする為に、専用の機械で水を噴出するアームが自動で移動しながら、土をおおまかに飛ばし、その後人力で蓮根を探しながら、掘る人の手にも水が勢いよく出るホースを片手に折らないように掘っていきます。

他では栽培されなくなった在来種の蓮根をあえて栽培している為に、根が深く作業が大変で、収量も半分と苦労されていますが、味と栄養価が高い事から作り続けています。2 代目の息子さんに圃場を案内して頂きましたが、熱い思いを胸に抱き一生懸命仕事に取り組んでいる姿を見ると、農産物に伝わっていると感じました。

今年の販売は昨年の天候不順で 3 月で終了していますが、9 月頃から再開予定ですので楽しみに待っていて下さい。

貴重な在来種のレンコン畑

# 訪問先　⑤

## シャボン玉石けん

**住所**　福岡県北九州市若松区南二島 2-23-1

### 会社内容

化粧石けん・シャンプー・リンス・粉石けん・漂白剤・石けんハミガキ・クレンザー台所用石けん製造、販売

意外と奥の深い石鹸の世界

### 基本理念

「健康な体ときれいな水を守る」

### 基本方針

1. 人と環境に優しい無添加石けんの普及によって、社会に貢献する。
2. 社会的責任を自覚し、企業及び地域活動の持続的発展に努める。
3. たゆまぬ努力と研究で、よりよい製品開発に努める。

### 環境方針

我々は、健康な体ときれいな水を守るため、人と環境にやさしい商品づくりを通して、社会に貢献し地球環境の保全を図り、次の世代に住み良い地球と社会を残すよう努めます。

### 歴史

1910 年（明治 43）2 月　現福岡県北九州市若松区で「森田範次郎商店」創業
1971 年（昭和 46）3 月　主力商品は、合成洗剤だったが国鉄（現 JR）から無添加石けんの注文が舞い込み試作
1971 年（昭和 46）4 月　当時の日本工業規格（JIS）を上回る「石けん分 96%、水分 5%」の無添加石けんが誕生。自宅で使うと、長年悩んできた湿疹が治る
1974 年（昭和 49）8 月　「身体に悪いとわかった商品を売るわけにはいかない」と一大決心し、無添加石けんの製造、発売に切り替える。売上は今までの約 1%に激減し、半数以上の社員を失った
1975 年（昭和 50）3 月　シャボン玉粉石けん発売
1987 年（昭和 62）3 月　新工場の落成に伴い「シャボン玉石けん（株）」に社名変更、現在地に移転

### まほろばの仕入れ品目

石けん各種、シャンプー、リンス、歯磨き、洗濯そうクリーナー　など

### 訪問した感想

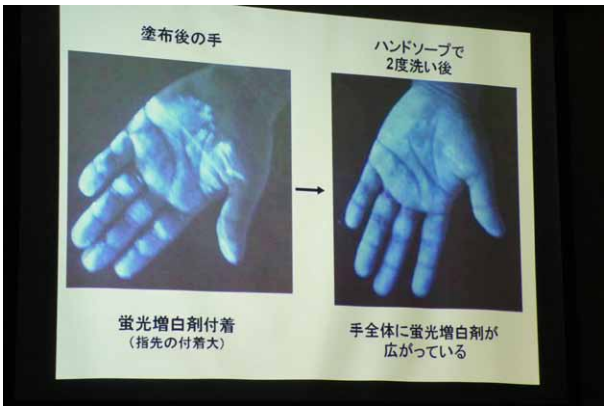
工場見学が一つの販売戦略や啓蒙活動となっており、石けんの奥深さ、合成洗剤の怖さを再認識すると共に、知らない事も多く勉強に成りました。

工場見学の中で、暗い部屋でブラックライトを使った実験がありました。クリーニングに出した人のワイシャツが光っているのは想像出来ましたが、新しい真っ白なタオルや　真っ白な下着も青白く光っていました。これは蛍光増白剤（蛍光染料）を使用している為ですが、石けんで洗うと黄ばんでくるのは、汚れが落ちないのではなく蛍光増白剤（蛍光染料）が落ちて行くためと解りました。

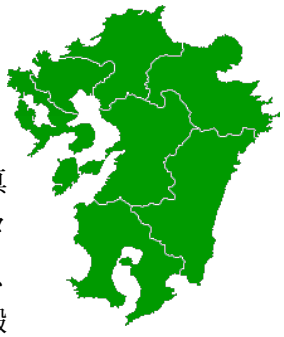
ブラックライトの実験。蛍光剤が光る

また合成洗剤にも蛍光増白剤が使用されている物も多く、白く洗い上げているのではなく白く染め上げていますので、やはり青白く光りました。もし手に付いたり、台所で使用しますと体内に入ってしまう心配がありますので要注意です。

最近は川底にブラックライトを照らすと青白




2度洗いしてもまだ残る…。



く光る所もあるそうですので、今の所私たちが使用しない選択をするしかありません。

業界の中では異端児で、今までの苦労と正しい情報を伝える報道の難しさを感じました。最近、「無添加」をうたう化粧品や洗浄剤が増えてきています。合成界面活性剤などが入っていても香料や着色料などが入っていないだけで「無添加」とうたっているものも多く存在します。もしかしたらそれは消費者が思っている無添加ではない可能性が高いそうです。一人ひとりが賢くなるしかないのでしょうか？

# 訪問先　⑥

## 平田産業　㈲

**創業**　明治 35 年

**住所**　福岡県朝倉市甘木 1330 番地

### 会社内容

全生産品目は、「遺伝子組換え原料不使用です」
純正菜種サラダ油、純正菜種油、圧搾菜種粕、菜種粕菜種油、菜種かす、製造販売

### 取り扱い品目

メープルシロップ、純正胡麻油、浅漬けの素、南蛮漬けの素、オリーブオイル

### 特徴

**1、原料のこだわり**

遺伝子組み換えでない菜種油を使用

**2、搾り方のこだわり**

物理方法で油分を取ります。圧搾法で一番搾りのみ使用

**3、精製のこだわり**

天然の地下水で、お酢と水により油を洗う物理的な精製で油を綺麗にしています。

情緒ある佇まいの事務所

### まほろば仕入れ品目

菜種油粕、ごま油

### 訪問した感想

甘木（あまぎ）鉄道（旧ＪＲ）甘木駅の真裏にその本社工場はあります。ターミナル駅の引き込み線の跡は、かつて 原料である菜種を大量に搬入してきたなごりでしょう。平田産業（有）の創業は明治 35 年。109 年の社歴で、レンガ造りの煙突が当時を偲ばせます。

今の時代、ほとんどの菜種油が遺伝子組み換えで、尚且つ化学処理された油を製造している中で、こだわりを持ち差別化をする事で、生き残っている数少ない油脂工場と解りました。

創業当時の煙突がそびえる

菜種粕も化学処理していない為に、油分が多く残った本当の菜種粕の為、引き合いも多いと聞いています。既に店頭に並んでいますので家庭菜園にお使いください。

**4 日間の九州縦断の旅でしたが、百聞は一見にしかずで、野菜や商品を見ると、作り手の思いと顔、その場の空気や香りを思い出します。**

**ほとんどの代表の方が、戦後の経済成長の中で、学生運動や環境問題の真っ只中を生きて来た方たちで、世の中に対しての問題提起から起業しているように感じました。自然食業界も当時は同じだったと思います。**

**その時代から 20 年、30 年経ち、どこも世代交代の時期に差し掛かっています。当時、何も無かった所から事を始めるエネルギーは、相当な思いがあったと思います。しかし、私たちの世代は、その熱い思いが無いままに、先人たちが引いたレール上を、只なんとなく走っているようにも思いました。今後、その先にある未来をどう切り開き、どこ向かわせるかが、どこも課題と思います。**

**まほろばも昨年で創業から 30 年経ち、降りて行く生き方を提唱しながら、理想と現実を如何に近づけて行く事ができるのか。今回の多くの人との出会いを大切に、更に考えて行きたいと思います。**

（ここまで、大橋）

# 想いが生み出す場の力

※店長が詳細にうまくまとめてくれたので、ちょっと趣向を変えて感想を書いてみました。

編集部　島田　浩

アンナプルナ農園で購入した村の風景

## ふとした思い

私たちの考えやイメージが、望む未来を生み出すのだということを、何度か記事で書かせていただいたことがある。では、いったいどんな未来を私は望むのか？　おぼろげなそのイメージを、さらにくっきりさせたいとかねがね思っていた。

年明けのことだ。ふと、「実際そのようにやっている人を訪ねてみればいい」と心に浮かんだ。こんな時代だ。すでに動き出している人は、あちこちにいる。ネットで検索すると、3.11 を機に熊本県天草に移り住んだ人がエコ・ヴィレッジを作っているらしい。いつか訪ねてみるのも良いかもしれないと思った。

天草のエコヴィレッジ

## 動き出した願い

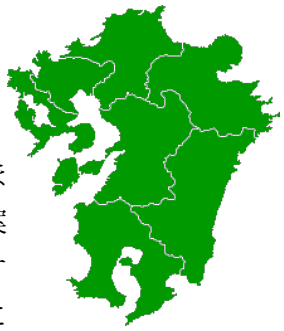
そんなことをすっかり忘れていた２月初め、九州出身のスタッフ山田が「九州ドライブマップ」を休憩中に事務所で広げて他のスタッフと盛り上がっていた。チラッと目を通すと九州もなかなか良さそうなところだ。さらに、その数日後、ムソーの小林さんと話しているうちに、ムソーさんが主催する「21 世紀を担う若手の会」の話になった。次回は九州で行うという。もちろんその時は、まさか自分がひと月後、九州に行くことになるとは夢にも思っていない。

会社の計らいで、店長と一緒にその会に参加させていただくことに決まったのは、申し込み締め切りも過ぎた３月初めのことだった。いつもは遠慮するところだが、この流れだ。乗らない手はない（笑）！

## いざ出発

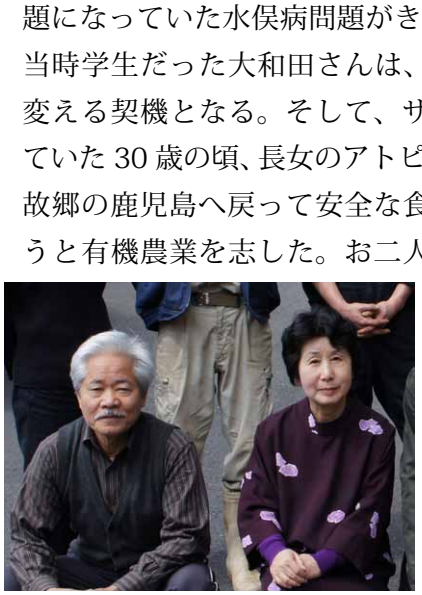
福岡で行われる「若手の会」に合流する前に何件か回ろうと計画を立て、鹿児島に向け大橋店長と二人旅立ったのは、3.11 から４年を過ぎた３月 12 日だ。まずは、震災・原発問題を機に取引の始まった「かごしま有機生産組合」を訪ねた。空港にはいつも店長がやり取りさせていただいている課長の伊地知さんが、忙しい中わざわざ出迎えて下さった。ちょうどその日は 13：00 から生産者との役員会があるのだという。それまでの１時間ほどを代表の大和田さんご夫妻と昼食を共にさせていただいた。

鹿児島空港



## きっかけは水俣病問題

会を発足させた経緯を聞くと、その頃社会問題になっていた水俣病問題がきっかけだという。当時学生だった大和田さんは、自らの生き方を変える契機となる。そして、サラリーマンをしていた30歳の頃、長女のアトピーをきっかけに、故郷の鹿児島へ戻って安全な食べ物を生産しようと有機農業を志した。お二人が目指したのは農による社会改革だったのだろう。社会を変えるためには、安全な食べ物を生産する人を増やすことが欠かせないと、会を発足することにした。今では何と130名もの有機ＪＡＳ認定農家さんが集う会に成長した。やがて生産者たちは、自ら作った野菜を直接消費者に手渡したいとの思いが募り、1992年にお店を開くことになった。それが現在市内に3店舗あり、奥さまの明江さんが代表を務める「地球畑」だ。



代表の大和田世志人さんと明江さん

「地球畑」荒田店

## エリクサーも使用中

実は数年前からエリクサーをご愛用いただいている。エリクサーやまほろばの生き方に、とても深い関心をお寄せいただいており、まだまだ話し足りない位だ。

事務所では若いスタッフの方々が明るく挨拶してくれた。代表の計らいで、役員会にも少しだけ参加させて頂いた。いつもお店で見かける大根やネギやトマトなどの生産者とご挨拶できた貴重な機会だった。車で40分ほど離れた場所にある自社農場を案内して頂いた後、今後のますますのご縁を感じながら鹿児島を後にした。

## 雲仙・島原からアンナプルナへ

その日の夕方、熊本に入り一泊。翌日早朝、熊本港から高速フェリーで、雲仙を間近に望む対岸の長崎県島原半島に向かった。「なかがき南部生産組合」を見学（詳しくは店長の報告をご参照下さい）後、とんぼ返りでお昼過ぎには熊本に戻った。スケジュールの都合で、天草のエコヴィレッジは割愛し、次の目的地は、かねて訪ねてみたいと思っていた「アンナプルナ農園」だ。

島原港と雲仙

## 山奥の茶畑

熊本駅でレンタカーを借り、一緒に研修に参加する沖縄の自然食品店「ぱるず」代表、諸喜田さんと合流して、1時間半ほど先の菊池市へ。そこからさらに山奥に車を20分ほど走らせる。ゴルフ場の脇を入った県道からやっと車一台通れるほどの狭い市道へ。片側から苔むした大きな岩がせり出し、反対は眼下に川筋の見える崖が続くヘアピンカーブを、恐る恐る駆け上がる。森を抜け、カーブを曲がると、パッと視界が開けた。そこはあたり一面に広がる山間のお茶畑だった。剪定作業中の若いお兄ちゃんに頭を下げ、小さな看板をたよりに、茶畑の間の農道をさらに上ってゆくと、ようやく正木さんの住まうログハウスが見えてきた。

## 歌でお出迎え

家に近づくと何やらドアの向こうから聞き覚えのある歌声とギターが…。躊躇しながら「こんにちは」と声をかける店長。ややしばらくして演奏が止み、「たった今できたばかりの曲なんだ」と笑いながら、久しぶりに会うお二人の笑顔が出迎えてくれた。娘さんのラビちゃんとご主人のオトさんも一緒だ。

ようやく、到着。

アンナプルナの美味しいお茶を頂きながらしばらく歓談した後、昨年購入したという「村」を案内して下さることになり、外へ出た。家のすぐ裏山は『木を植えましょう』にも描かれた、はげ山に皆で植樹した花鳥山（はなとりやま）だ。2000年に植えられた苗木はすっかり大きくなり、立派な森の佇まいを見せていた。正木さんに急に歌が降りてくるようになったのも、植樹してからの事だったそうだ。それは山の神、森の生き物たちからのプレゼントに違いない。

花鳥山の入り口付近

## 幸せの時空

奥様のチコさんが、道すがら「最初に建てた家の方へ行ってみましょう」と案内してくれた。夕方の斜めに差し込む柔らかい日差しに照らされながら、お茶畑の脇をみんなで歩いた。剪定された枝が散らばり、ほのかにお茶の芳香があたりに漂っている。その時だった。ふと、何とも言われぬ幸せな感情に心が満されている事に気づいた。いったいこれは何だろう…。すぐに心に浮かんだのは、「この土地に宿った愛の想いのエネルギーではなかろうか」という事だった。それは、昨秋読んだアナスタシア第4巻『共同の創造』（ウラジミール・メグレ著　出版：直日）に出てくる、一人ひとりに与えられる「祖国」のイメージが重なったためだ。

幸せな空間を感じたアンナプルナの茶畑

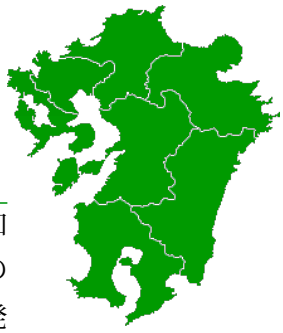
## 一人ひとりの祖国とは

少し横道に逸れるが、その本で言うところの「祖国」とは、いわゆる国の事ではない。主人公であるアナスタシアが夢見る、人々の本来の生き方、それを実現するために与えられた各々の居住区のようなものだ。そこでは、彼女の思い描く未来像として、1ヘクタールの土地をすべての人が無償で与えられる。様々な木々で彩られた生垣で仕切られた土地の半分が、美しい森になっている。その森の開けた部分には、祖父が植え両親が育ててくれた木を伐って作られた家と、自給用の畑や果樹園だ。その森で愛を育みながら子供を育て、自然と共に暮す。そして、森の中で、いつか土に返り永遠に子孫を見守る。そんな人と自然が一体となった理想郷をすべての人が手に入れるというイメージ夢だ。その土地には家族の愛のエネルギーが宿り、邪悪を遠ざけ、愛に満ちた時空間が生み出されるという。

心をこめて山から水を引き、自ら家を建て、子育てをし、山に苗木を植え森を作り、そしてお茶を栽培してきたアンナプルナ農園のその場には、まさにそんな空気感が生み出されていたように思う。離れがたい幸せな余韻が辺りを包み、心を満たしてくれた。「あぁ、これを見たかったんだ」と、一人納得した。

## 未来へつなぐ村

村は私道を10分ほど登ったその先にあった。40～50年、人が住んでいないという5～6軒の小さな集落。最近まで地主がキャンプ場として利用していたという。



その村の敷地内には、正木さん一家の命をつないでくれている大切な水源がある。見知らぬ人の勝手にされてはたまらないと、意を決し、有り金をはたいて少々無理をして村まるごと購入されたそうだ。草ぼうぼうで荒れ果てた廃墟のような家屋に、昨夏から少しずつ手を入れ、福島の人を受け入れたり、イベントをしたり、カフェを開いたりと、これからの新しい活動拠点となりそうだ。残念ながら先ほどの茶畑で感じたようなエネルギーはまだ感じられなかったが、やがて年月を重ねながら、人と人、人と自然をつなぐ素晴らしい光を放つ場所となることだろう。

村の入り口に建つ「テンプル」

## しあわせの余韻に浸る

家に戻ると、ミニコンサートが始まった。おなじみ『木を植えましょう』や「これはお経だよ」と笑いながら歌ってくれた『慈しみ』…。チコさんがギターを弾き、正木さんが太鼓をたたく。ラビちゃんとオトさんはウクレレで。みんなの歌声の向こうからは窓越しに夕日のスポットライトが照らし出す。炎のゆらめく薪ストーブの傍らで、愛犬のニコが心地良さそうに目を瞑る…。それは、なんとも幸せなひと時…。皆様、選定作業の忙しい合間に素敵な時間を作って頂き本当にありがとうございました。阿蘇は回れなかったけれど、そんな事どうでもいいと思えるような一時でした。

左から正木さん、チコさん、ラビちゃん、オトさん。

## 水の子さんへ

翌日は、朝早く宿を出て、不知火海に面する八代（やつしろ）の「水の子」さんへ直行。新八代発10：30の新幹線に乗らなくては、12：30小倉で集合の「若手の会」に間に合わない。滞在時間は1時間ほどだ。

## 八代のお父さん？

ここはスタッフ山田の紹介で、お取引が始まった。彼女が北海道に来る前、一度仕事をしようと飛び込んだものの、視力の悪さに、池の中での作業は危険と判断され断念したそうだ。今でも時々、心配して連絡をくれるという、そんな親御さんの様な方が運営されている。その方は、代表の上村茂則さん。やはり水俣病問題がきっかけで、今の仕事を始められたそうだ。あいにく9：00から出張のため、ゆっくりお話できなかったがご挨拶だけさせていただいた。

水の子代表、上村茂則さん

代わりに息子さんの一宏さんが蓮根畑を案内してくださった。手がかかる分おいしい、在来種の古代蓮根を栽培され、加工品も手がけている（詳しくは店長の報告をご参照下さい）。忙しい中、説明頂き、掘りたて蓮根の手土産まで頂いた。奥様も、お嫁さんも、事務所の方も、皆にこやかで、心地良く出迎えてくださった。事務所の壁の上のほうには「ありがとう」と書かれた札が貼られていたが、確かに効いている感じがする(^^)。（もちろん、それだけではありません…。上村さんの信念と感謝の想いの結晶です）

## 「若手の会」に合流

後ろ髪を引かれつつ、急ぎ新八代へ。新幹線発車まであと30分、ナビの誤作動（？）で駅から5キロも離れた地点に到着。大慌てで引き返し、

ぎりぎりセーフ。なんとか、集合時間に間に合った。食事を済ませてメンバーと合流し、まずは北九州市にある、まほろばでもお馴染み「シャボン玉石鹸」さんの工場へ。もう少しシックな感じを予想していたが、とても立派な工場でビックリ。

## 信念の決断

1910年創業後、合成洗剤の製造で売り上げを伸ばしたものの、ある時、社長自身の腕に原因不明の湿疹が。原因は合成洗剤とわかり、悩んだ末、なんと全面的に安全性の高い石鹸に切り替えたという。売り上げは最盛期の1％まで激減し、倒産の危機に。そんな修羅場を乗り越えてきた、とても志の高い会社であった。機械化されているとはいえ、工程は1週間窯で煮詰める昔ながらの製法。仕上がりは何と作業員が直接石鹸を舌で舐めて確認するこだわりよう（舐めても安全だからできる）。多くの学びを得て、次の目的地へ移動した。

## 平田産業さんと蔵肆（くらし）さん

高速を1時間半ほど飛ばし、着いた所は、福岡県中南部の朝倉市にある平田産業さん。まほろばではごま油や菜種粕を取り扱っている。北海道産の菜種を昔ながらの圧搾法で搾った菜種油が主力製品だ。ムソーさんとは古くからお付き合いがあるそうで、安全な製品作りに信念を持って長年取り組んでいる。今後は、九州各地にオリーブの木を植え、地元産のオリーブ油造りを軌道に乗せたいという。

平田産業脇の筑後川には菜の花が

翌日は、朝からホテルの会議室で参加した自然食品店若手経営者の皆さんと懇談した後、久留米にある自然食の店　産直や蔵肆（さんちょくやくらし）さんへ見学に。店長の鶴久格さんにお話を伺い、2階でミーティングの後、解散となった。

## 想いが生み出すもの

この4日間、どこへ行っても感じた事だが、皆、大地への愛と自然への慈しみ、あらゆるもの、そして人への思いやりにあふれていたように思えた。

天草に行けなかったのは、もっと内面に目を向けるように、形を生み出す前にある、その想いに心を向けるように、との教えだったのかもしれない。

会社もそうだが、あらゆる物も、農産物も、人生や社会さえも、私たちの想いが生み出したといえるのではないか。その想いのエネルギーこそが、目の前にある現実を生み出す元になっているのではなかろうか。

今回出会った方々の中に、確かにある熱い想いと、その創造物である法人や農園、農産物を見せて頂き、たくさんの希望と励ましを頂いたように感じている。

もちろん、今のまほろばも、まほろば自然農園もまた、社長、専務の自然回帰への願い、そして一歩一歩の行動とが生み出し、お客様のお力添えを頂きながら、スタッフと共に築き上げてきたものだ。その志を忘れない様、そして、想いのエネルギーを高めて、さらなる理想を目指して行きたいと思う。

## ありがとうございました

最後に、今回関わっていただいた方々、見学会を企画していただいた出口社長率いるムソー㈱の皆様、生産者の皆様、留守を守っていただいたスタッフの皆、社長、専務、そしてすべてのお客様に心よりお礼申し上げます。よき出会いを与えて頂き、本当にありがとうございました!!

産直や蔵肆さん